

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 舞

本論文では、殷代青銅器の製作方法および鑄造関係遺物・遺構の分布状況から殷代の中原地域および一部長江流域を含む範囲内での青銅器生産の構造を復元する。

第一章では、殷代における青銅器生産の実態を異なる三つのレベルにおける分業の積み重ねと考え、各レベルでの分業のあり方を、青銅器そのものおよび青銅器製作工房の立地やその内部での各種鑄型の分布状況という二つの側面から分析するという方針を示す。

第二章では、殷前期鄭州商城での青銅器生産のあり方を検討した。爵が器形・紋様・鑄型構造から三系統に分けられること、そのうち一系統の紋様・鑄型構造が二里頭期の青銅器に類似し、かつそれが殷前期までしか見られないこと、また他の二系統はこれとは異なる器形・紋様をもち、殷中期に至ってひとつの器形に集約しつつ殷後期に継承されたことから、殷成立期には二里頭文化からの技術あるいは製作者の流入があり、それと並行する形で殷的要素をもつ青銅器が製作され、殷の青銅爵が確立したと考えた。

第三章では、従来、殷前期の青銅礼器の生産は都鄭州以外で想定されることはほぼなかったが、長江中流域に位置する盤龍城出土青銅礼器の検討を行い、従来言われていたような都鄭州からの搬入品ではなく、少なくともその一部が都以外で在地生産されていた可能性を具体的に示している。

第四章では、殷後期の都殷墟遺跡所在の墓から一括出土した同銘青銅器群を材料に分業問題を検討しているが、従来とは異なる視点として、銘文もまた製作されたモノとして捉えた。銘文の字体差という観点から、爵・觚、両器種以外の容器類、武器類という用途・器種別生産のあったことを明らかにした。また、施銘工程を含めた分業の確立は殷墟2期末であり、その後簡略化しながらも4期まで継承されたことを明らかにしている。

第五章では、殷代後期の武器生産では施銘と施紋が同一の工程として行われ、容器生産とは工程分業のあり方が異なることを再確認している。

第六章では以上の議論を踏まえ、殷前期では都鄭州、黄河中流域、長江流域という三つの地域での生産を認め、これらの各生産地点はいずれも同レベルの生産を行う緩やかな関係性であったと理解した。殷後期になると施銘工程の導入およびその確立、用途・器種別生産など、都殷墟遺跡では生産の組織化が進み、かつ殷前期に比較的緩やかな関係性を保ちながら各地で展開した青銅器生産は、都殷墟遺跡にほぼ集約化されたものとした。

本論文は殷代青銅器についての綿密な観察および銘文を交えた分析を通して、殷代の青銅器生産体制の実態の解明に取り組み、新たな知見を提示している。個々の分析には検討が不十分のところも見られるが、本論文が殷代青銅器生産を考える上できわめて重要な論点を提示していることに疑問はない。よって、審査委員会は一致して本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。